

查
魚
誌

查
魚
誌

查魚誌

查魚

本朝食鑑
作查魚

一名滿方又名浮龜

常陸國志曰查魚國訓宇岐々東海出大者一丈許小者五六尺扁形細鱗背上有
堅皮如鮫背以是狀類查故名三四月間出美味

本朝食鑑曰ク此ノ魚無レ名ノ字一故據ニ俚語ニ製スレ字楂者浮木也常奧海濱采^{トル}

之狀類ニ海鯨ニ火者方一二丈小^{ナル}者五六寸無レ鱗色レ白性愚不レ知レ死 漁人

遇ニ江上一則懸^チニ長鈎^テニ而^テ使魚不能ニ動躍一用小刀一割^キニ魚背^ヲ一取^リニ百

腸^ヲ一而^テ歸其腸長^サ丈餘呼^ン號百尋^ト一其肉味亦不レ惡小^{ナル}者海俗食^テ之^ヲ稱^ハ佳

而下品然肉易ニ餒敗^シ一不能^クニ維持^{スル}コト一故ニ漁人不采^レ肉^ヲ而去^ニ其腸^ヲ一作^レ

鮓^ニ作^スニ糟漬^ニ或乾曝^{シテ}而鬻^グニ之^ヲ國^ニ亦貢^ニ獻^之一○腸甘温無毒主治專^ラ

宜癰疽瘰癧乃類^ニ一癰疽全不^レ食者用^ニ味醬^ヲ一而煎^レ之食^レ肉啜^レ汁則必進^ム

食^ヲ

大和本草^ニ曰 マンボウヲ奥州ノ海ニアリ形方ナリ長六尺バカリ大小ア
リ其肉潔白ナリ油多味ヨシ又曰ウキ木奥州ノ海ニアリ 形状海鷄魚ニ似
テ大ナリ方一二丈漁人刀ヲ以テ其肉ト腸トヲトル動カス味ヨシ 他州ニ
ハナシ然カレトモ北海ニ雪魚アリ方一丈餘其形 鰈ノ如シ其肉白ク如雪

潔シ脂ナシ好テ睡ル于海上是浮木ノ類乎

采藥使記曰浮木魚重康曰奥州オナノ濱ト云フ所ヨリウキト云フ魚アリ其魚餌袋ヲトリ乾シテ久痢二煎シ用ヒテ功アリト云袋計取テ外ハ皆五穀ノ糞培ニユルト云フ ○光生按スルニウキ魚奥州常州ノ海濱ニ多ク是採ル其状海鯨ノ如ク小サキ物ハ五六寸大ナルハ一二丈計此魚性愚ニシテ死ヲ知ラス漁人熊手ヲ以留メ採ルニ動躍スルコトナシ浮木ノ水面ニ有カ如シ故二名ツク 古今累聚常陸國志二曰查魚大者一丈許小者五六尺扁形細鱗背上堅皮アリテ鮫ノ如シ三四月ノ間ニ出スト云ヘリ或曰大穰海志ニ載ル所鮭鱈ナルベシ物品目錄植魚一名滿方常州奥州有之状類海鯨而大者一二丈小者五六寸無鱗而白色骨硬味不佳性魯鈍不知死浮游漁人以長杷留則苗恰植割背取白腸長丈余名百尋作鮓[?]作糟漬或曝乾食之肉甚餒敗不能經時其腸專治癰疽瘰癧及泄瀉用味醬而煎之啜汁

日東魚譜曰雪魚釋名^{ウキギ}浮龜人以為龜類此物時浮于海上形如龜背而其骨皆肉也故名有大小大者圍數丈見口眼首尾性愚不知死海人^{ウカガヒ}候ニ其出ニ乗レ舟近之上其背上割取其皮肉曾不覺痛苦若動搖則以笠招呼万歲樂則如故是故名万歲樂其肉白而無脂油味似石決明肉

○氣味甘淡温無毒主治益氣下乳汁長肉患癰疽人食之則治癩肉長正肉此者浮水面不去其處八九日

山崎美成提醒紀談ニ鳥紀々

附録浮氣

ウキギ 此方名魚胃呼浮氣讀浮氣訓宇岐々以充于浮龜此即大

鮓魚之胃府也（腑）枚之去化物益藏或藏粕食益氣長肉下乳汁之功之一也
凡夫物同其趣盖胃氣之海也是以食之則同氣相求入于胃益胃氣故有益
氣長肉下乳汁之功名浮氣亦宜也

查魚全圖

頭脊ノ沙皮暗二連錢ノ紋アリ

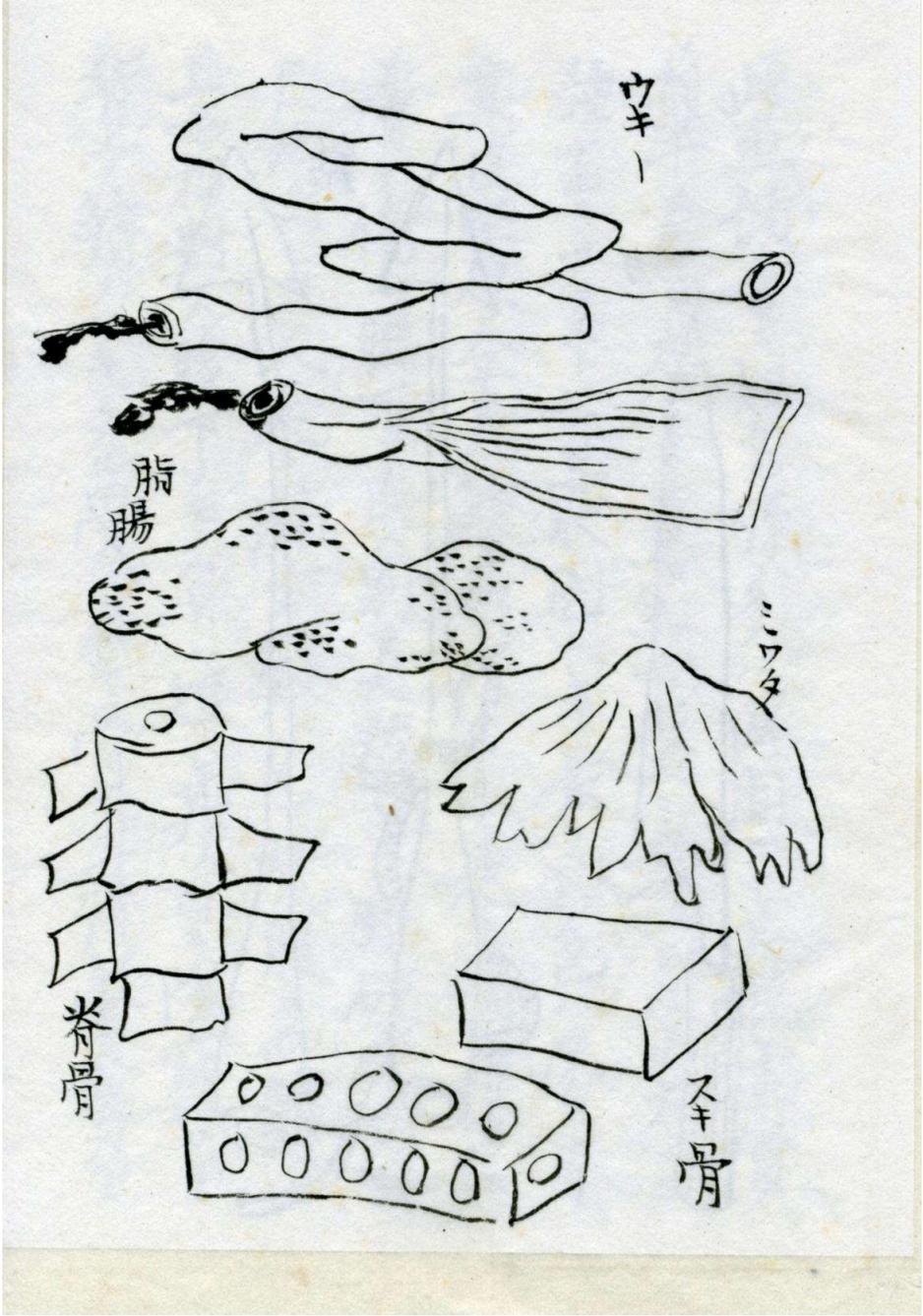
（圖 略）

割魚腹採白腸圖

（圖 略）

入魚腹肉採脂腸圖

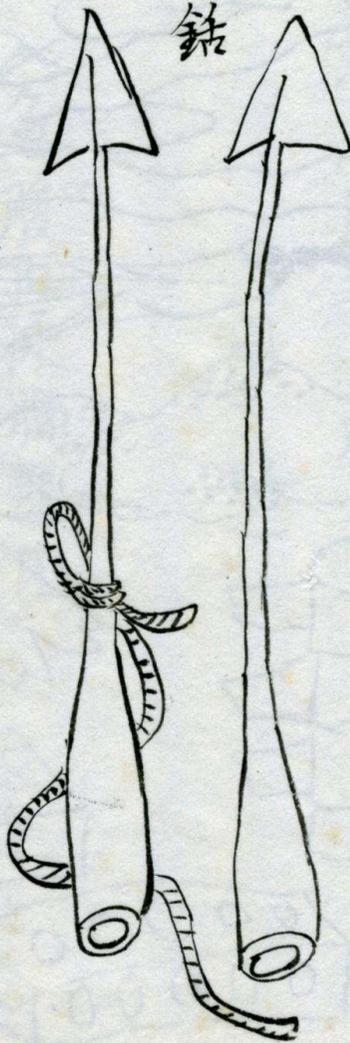
（圖 略）



刀



銃



此魚諸書ニ記セル所多ハ傳聞ニヤ其説虚實相半ス魚ニ大小アリ大者五六七丈小者二三尺也大小二種アルニアラズト云其狀圓ニシテ長ク其色ハ灰色ナリ其皮堅厚全身鮫ノ如シ沙アリ是ニ觸時ハ皮膚ヲ傷ル腮下ノ皮ハ別テ大粒ニシテ堅硬ナリ刀室ヲ飾ルヘシ土人は是ヲ滿方鮫トイフ背腹ニ兩鰭アリ上下相對ス腹下ノモノハヤヽ短シ其前ニ陰竅アリ背上ノ鰭ノツキタル骨ヲスキ骨ト齊シ生食スルニ淡薄無味只潔白柔軟ナルカ故ニ盃盤ニ供シテ酒卒トナスウチノ骨ハ常魚ノ骨ノ形ニ異ナラズ無骨ミナ肉ナリトイフ説ハ此魚ノ骨皆柔軟ナルヲ以テカクハ言誤リナルベシ領傍ニ翅アリ其下孔アリ是ヲカヽケ見レハサヽメ見ユル其口至テ小ニシテ齒有常ニ水母ヲ食スルノ外餌スル所ナシ尾ナクシテ常魚ニ比スレバ尾ヲ断ジタルカ如ク尾ノ方ヲ土人尻コロモト呼ブ皮ヲ去リ煮食スルニ潔白スキ骨ノ如クニシテ又更ニ柔軟ナリ其味淡薄ニシテ其齒切レハ石決明ヲ生ニテ喫スルニ似タリ其味ハ石決明ニ似ス眼胞ヲ採リ内外ノ皮膜ヲ洗ヒ去リテ乾シテ漁兒螢火ヲ盛テ玩弄ス其指度五六寸至ル有此物寒冷氣候ニ少ク温暑ニ多シ逆潮トテ北ヨリ南ノ潮ニ來ル汀ニ寄ハ稀ニシテ五十立海底五十尋ノ深ヲイフヨリ多ク浮テ波上ニ背ヲサラスニ似タリ故ニ炎天ニ多クシテ冬寒ニ得ルコト少シ然レドモ龜ノ甲ヲサラストハ異ニシテ形体ハ波面ニアラハレ出ルニアラズ全身ハ猶水ヲ帶テ水中ニアリ其性好テ睡其睡時ニ背ノ鰭ハ波上ニ出テ見ユルヲ尋求メテ漁舟ヲ近付銚ヲ投ス大魚ハ二銚ヲ投スルニアラ

ザレハ捕ヘガタシ銚ヲ投スルト乍チニ沈没ス其銚ニ數十尋ノ綱ヲ付其末
ニ帆檣ニ結ツケテ是ヲ海中ニ投ケ捨テ魚ノ驚動出沒右往左往スルトキハ
舟ヲ退ケテ往ク所ニ任ス性愚ニシテ死ヲ知ラズト云フ説ハ誤ニテ舟近ク
時ニ睡ヲ醒シ逃ルヲ遂テ銚ヲ投ズルコトモアリト云フ時ヲ移シテ魚勢ノ
盡ルヲ候ヒ檣ノ浮所ヲ尋テ引寄舟ニ縛シテ魚ノ横腹ヲ四角ニ割穿チ猶鈎
ニテ皮ヲカゝケ皮ノ沙ニテ肌膚ヲ傷ルコトヲ防ク其皮ヲトイト呼厚サ五
六寸モアルベシ 腸ヲ取出テ舟中ニ繰入十數尋ニ及ブ是即ウキ、也 腸
中餌物フクレテ有ヲ舟外ニテ刀ヲ以テ割破ル皆水母ナリ誤テ舟中ニテ是
ヲ割出セハ人ノ手足ニ觸テ痛痒ヲナスウキ、ヲ取盡シテ後ニ脂腸ヲ取り
脂腸ハ色白カラズ諸魚ノ脂腸ニ齊大魚ナレバ漁人腹中ニ入テ是ヲ取り其
人乳丈ニ及ブモノ多シト云一魚ノ脂腸ヨリ油七八斗出ルト云魚ハ捨テ載
来ラススキ骨ハ必採ラス其利少キノ故ナリ ウキ、ト油腸ノ外ハ腹内ニ
アルモノナシ只ツブコト称スルモノアリト無トハ雌雄ニテ異ナルニヤサ
レド至テ細少ニシテ卵ナルヤ否ヤモ詳ニ知ルヘカラズ 土人ミハタト呼
モノ食スベシ腸ニハ非ズ肉ナリト雖モ皮ト肉トノ間離レテ其間ニ多ク水
ヲ蓄ヘ骨ニ著テ有ル所少ナシ但皮厚テ裏面肉ノ如ク引アクル時肉ト離レ
テ見ユル故ワタト称スルモ宜ナリ倭敗シキ故ニ府下ノ魚市ニ稀ナリ況ヤ
遠キニ致シ難シ其色白常海ニテ雪魚ノ名ハ呼サレドモ雪トイフモ宜ナリ
脂腸ヲ味醬ニ和シ是ヲアヘテ餌ス又引割テ酢ニテ生食ス又燂テ飧何レモ
美味ナリ海人ハ塩噌ヲ不加シテ肉ヲツマミ切ナカラ食ス万歳樂ノ名ハ何

レノ地ニテ目出度唱初タルヤ 日東魚譜ノミニ載ス

臣項招ニ應ジ暇ヲ乞テ奥州小名ノ濱ニ到ル幸ニ老漁師ヲ召シテ彼地
満方ヲ捕ルコトヲクワシク尋スルニ常海ノ法ニ大抵ハ同ジク ヤ、
異ナル所ハ漁師ノ方言辨ジカタキニテモ有ヘキニヤ老漁ノ言フニ曰
大魚ト云モノニ疊敷ホド小トイフハ五六寸ナリ横ニ平メニナリテ海
上ニ睡ル其時ハ全軀水上ニアリ銚ヲ投ジテ是ヲ捕ル又銚ノ投惡時ハ
鈎ニテ引返シテ銚ヲ投ジテ沈マントスルトキハ鈎二本モ捕[×]打掛テ舟
ニ釣リテ腸ヲ取又ウキ、ト脂腸ノ外ニ星ト云フモノ有食スルニ堪タ

リ委ク尋ルニ心肝ノ類ニテ
キモト呼ベキ物ナリ

鮫皮ノ所ハ必採リテ官ニ捧ルヨシ臣更ニ問フ

満方ヲ捕ルニハ睡リシモノヲ尋ネテ捕ヤサテ又鈎ニテ引返シテ銚ヲ
投ル時ニハ死物ニ非サレハ必動揺スベキナリ其睡リハ如何ニモ醒サ
ルヤ且其大ナルモノニ疊敷トイフハ猶常海ノ小ナルモノニ比スベク
モアラズ夫ヨリ大魚ハナキニヤ老漁答テ曰背ノ鰭ノ波上ニヒラメク
ヲ見ツケテ捕ルナリ銚ヲカケテ沈マントスルトキハ鈎ノ二本モ打カ
ケテシカト舟ニ引寄せヲキテ腸ヲ採ル此時ニ勢ノヨキハ一二丁モ舟
ヲ引カル、コトモ有某壯ナル時ニ大満方ニ逢タリ其の形ハ幾丈トモ
知カタシ既ニ銚ヲ投ゼントスルニ余リニ大魚ナレバ人々恐シトテ諸
舟一時ニ退テケリト又問平タクナリテ横ニ浮ミテハ鰭ノ水上ニ出ル
ノ理ナシ如何シテ鰭ヲ目當トハシテ捕ルヤ漁人ノイハク睡ヲシラホ

シト云其時ニハ鱸ハ見ユルモノナリトハ對ヘタレドモ其言葉窮シテ
ケリト見受侍ヘリキ又江名ノ濱ノ人ヲ得テ問ニ大抵ハ同ニ切三切ト
云ヲ以テ魚ノ大小ヲ分ツ二切トハ二ツニ切りテ舟ニ積ムノコトニテ
三切ハ大魚ナリ星ト称スルモノハ有トミヘテ此人モ物語レリ臣先ニ
磯ト濱ニテ寫サスル時ニハ漁人此故ヲ告サル故腹内ノ物ハ残ラズ取
出ヌレトモ所謂星ハ見落シテケリト覺エテ眼ニ觸レヌ故ニ圖ニモ寫
サス今更再ヒ魚ヲ捕サセンハ漁民ノ費用不少ノ恐アレハ後來目撃ノ
序待テ記上セント是ヲノコス常海ニテ捕ル魚ハ大魚ニテ幾ツニ切り
テモ舟ニ積ヘキニアラズ奥海ニテハ小魚ノミヲ捕ヘテ大魚ハ稀ナル
ニヤ又ハ恐レテ捕ヘザルニヤ常奥ノ漁人ノ意趣ヲ考フルニ常ハ利ノ
爲ニス故利スル所計ヲ採テ魚ハ捨テ載来ラス奥ハ食ノ爲ニス食スル
所ヲ以全國ヲ載来ナラン一番舩ニテ脂腸トウキ、トヲ取ルニ番ニテ
首ノ方ヲ断テ取ルト申ス故首ノ方ニ何益有ヤト問ヘハ肉ノ食スベキ
所多ク喉胸ニアレハナリト答ヘタルニテカクハ考テケリ魚モ又常海
ヨリハ少キカト思ル、コトノ候ヘキ

腸ヲ取テ陸ニ歸リ是ヲ一尺余ニ断シ又堅ニ割開ク即ウキ、ナリ燂テ喰美
味ナリ塩蔵シ乾曝シテ久ニ堪ユ其法

一、ウキ、一枚

長 一尺一寸

幅 四寸四五分許

厚 四五分

塩三合大抵八十日計漬置土用中烈日ニ曝乾スルコト十余日スルウチ
収蔵ス

享和二年壬戌七月

享和壬戌之春二月乞暇遊江戸屢辱謁見且有

命日客歳紀州海中得查魚紀人不識其製

★

紀公請其法乃今欲告之然而全郡吏等記之恐レ多ニ違漏ニ而執褊心秘ニ其
法ニ記而不レ詳則非ニ

予意夫查魚ノ産

吾東海久之其功能天下之所レ知今紀海産レ之則豈啻紀人之利レ之、

西邦之民庶蒙ニ其益ニ者不レ少傳ニ其製ニ不レ精則紀人或云惜レ之而不トレ

傳汝悉記上レ之昌克帰郷報之ヲ有司ニ郡宰ニ傳ニ

★★

令磯濱村ニ得ニ小查魚ニ来告_グ昌克往視レ之親_ヲ割レ之採_レ腸召ニ漁師ニ詳ニ

其捕之事ニ使ニ画工_{ヲシテ}圖_レ之塩蔵曝乾之徴_レ之肴奉行且古人所_レ言及ニ

查魚之事ニ集_レ録諸説ニ以進

呈如_シ前_ノ侍醫臣昌克頓首再拜謹識

註

★★★ 紀公 恭舜公・治宝卿
★★★ 令 借令
★★★ 侍醫 原南陽

本書ニ関シテハ

『日本及日本人』臨時増刊『郷土錦萃』号 (一九一五年) 大正四年十月発行

『水戸の名産浮木』 島田筑波 記(五四一頁) 参照すべし(芝)

梅雨もどうやらあがったようでもことに結構な梅雨でした。郷土会五十一番査魚志についての御記述拝見しました。此の査魚志は水族志に見えてゐるもので斯様な著であろうとは一向存せず大いに啓蒙を開かれました。私は満方と云ふ大魚珍魚のあることを山崎義哉の提醒紀談ではじめて知りました。それによると査魚所謂胡浮木といふのは其の腸を云ふのであるとしてあり大和本草の記述は別魚の如くなるは大いに誤れりと云つてゐます。それで見るごとに注意をしてゐましたことです。今はからずも其の査魚志は御手許にあることを知って実に遠くて近いことを覚えまして一人驚いてゐます。いづれ御用しまいの節一寸御貸被成度御願ひ申します可随筆には圖をあけて牛魚圖説としてあり水族志には萬歳樂(一名)とあり沖万歳といふことを記し日東魚大和本草雪魚といふともあつて実の名なる由

御坊市島

芝口 常楠 様

和田

和田 喜久男

七月十日

☆此の文葉書、表の下も使用している

查魚志まことにありがとう御座いました。こんな書見られる由もないと思つてゐたのに、はからずもあなたの御注意の御陰で写し取ることも出来ましたことでしたのはまことに喜び居ります。

これを写すと共に私の諸書にある查魚についての記述を全部写しとりまして一冊となしましたことでした。斯うすることによつて見聞が一まとめになつて世話なしに見られるからであります。

田端憲之助氏の報に戦後も吉原で四十貫(kg)位のをとつた由であり漁人は切りわけて肥料にした由で腹には水母ばかりであつた由であり肉は食つて見た うまくなかつた由であります。昭和初めに捕つたのはあなたが見て満方といふことが確認したので満方とは存じてゐたが查魚といふことは一向に知らなかつたとのことであります。まことに查魚などといふことは本邦の名ではなく矢張り舶来の名であることとせう。

うきぎと云へば聞えますが故に矢張り水族志に見える寧国府志勝に見えるところとあり新撰常陸国誌に大穰海志に鮠鱗とあるとしてあるなど常奥の海はかりの魚ではなく支那にも毎歳上巳前後数日出とあるといふのでも支那にもあるのでせうことはいふかゞはれる。

昌克伝 大日本人名辞書で写しまして查魚志へはさんでおきました。御参考まで

近頃一寸拝見仕りました」と云ふは近刊の『圖説日本文化史大系』といふ小学館発行の十三冊の大本です。これは当地の大森氏が持つてゐるのを順々に借りて拜見しています。

それは圖説とあるだけに写真をうんと使つて中々参考になる良書であります。それに古律書殘篇と云ふ各国の郡郷についての殘片の写真をあげて其の内に紀伊国の

「紀伊国

郡七 郷卅七 里百目
去京行程 三日

守介掾大省五位以下也」

とあります。之れは題目も著者も不明であるが今は散逸した奈良時代の諸律を伝へる重要な資料であることは文中其野監をあげてあり之の存在は奈良時代初期であるから其の時代のものであることが明であるとしてあります。原文書お茶水図書館蔵とある。之と和名抄と比較すると郷で十六を増加してあるのを見ても亦其の間の消息がうかゝへると存じます。

子細に見てゆくとまことに面白いが とても今の私には其の根気はない。面白い写真だけをひろい読みしてゐます。これなどは実に今までも思ひもよらなかつた資料であろうと存じます。ツンボ棧敷にゐると細かいせりふは聞えませんが困りますが止むを得ない不徳なのです。

今度顕彰会の人達は龍神行の由ですがよいお土産を持って帰つてく

れるか知らと存じてたのしんで居ますが 先達君がも一歩はつきりして呉れると面白いが 的をはずしてゐるので一寸物足りないところけれどもないのにかず あれは御くよんばするまでの話であるので文句をいへない解ながら欲には欲のあるものでもっとくくと存じます

あなたも此の行に加はつては如何ですか そして新資料を蒐集して来て頂きたいものです

先日は片山氏の慰安会御歓談の趣 氏も中々元気で大いに羨ましく存じます 井上氏のあの 片山氏論何とも云つてゐましたでせうか

七月二十二日

和田喜久男

芝口様

台風の由ですが十一—十五米位では大いに結構のことと存じます

大日本人名辞書（明治十八年一月 經濟雜誌社刊）

原

南陽 水戸侯の医員なり 名は昌克 字は子柔、玄興と称す
南陽は其号 水戸の人 父昌術 始めて医を以て本府に仕ふ
南陽京師に遊び山脇侃（東洋） 賀川玄悦に術を受く伎 卓越
名東国を掩ふ 其医經を治むる章句とせず専ら適用を主とす
著す所の諸書後学奉して至宝とす 南陽国候の為（一八三五年）に知られ、二
世に曆事し侍医となる 三十余年優名致仕す、文政八年八月十六
日歿す 年六十八 始め南陽其名昌術サキ甲斐の名將なるを以て常
に方伎に食するを恥づ 子昌綏禄を襲ふに及びて候命じて改め
て諸士班に就かしむ、以て其志を成す、昌綏進んで軍師となる、
南陽著す所 叢桂偶記、医事小言、經穴彙解、瘕狗傷考、傷寒
夜話、疽瘡策、脚氣編、叢記、藥語、西遊雜記、百余縁、解毒
奇効方、寄奇方記、砦草等あり（皇国名医伝鑒定便覽）

先去はマンボウについて色々御教示にあづかり御陰でほゞ実体を
つかみ得た気がいたします 田端憲氏の話に戦後も四十貫位のを吉
原の浜で獲った由 昭和初年にはあなたがマンボウと判明したのだ
とのこと 其の四十貫位は海母ばかりを食してあり肉は喰って食へ
ないことはないが味くはなかつたので肥料にした由であります 又
近く若山の魚屋中尾庄兵エ氏が私費で和歌浦に水族館を造り其処へ
三米余のマンボウを飼育してゐる由大毎に見えたとあります 御示
しの南方翁の盲亀のこと全集で尋ねれども見あたらず只田辺藩のお
留め物若干あり古屋瓜谷の盆石マンボウ魚安藤柑の如きとあるのを
見付けましてマンボウをお留物としたのはまことに解し兼ねるが、
それ程に獲れたのであろうかと存じます
先日来子供達が来て閉口いたしました 猛暑御自愛の程お祈りいた
します 私が目下大いに健康を得まして持病のみとなりそれも大い
によい様です

御坊市島

芝口常楠様

和田

和田喜久男

八月七日

☆これも葉書表宛名下1/3使っている

本書は芝口常楠先生所蔵本より写す。巻末の書簡は和田喜久男氏より芝口先生に宛てたるものにして、すべて查魚に関するものなればここに納む。尚七月とあるのは昭和三十三年のことなり。

昭和参拾六年拾月壱日写本了

清水 長一郎

『查魚誌』写し終わって

「查魚」広辞苑を探しても見付からない。ネットで調べると「查魚誌」Ⅱ「まんぼうし」原南陽とあり、一緒に内閣文庫所蔵の画像まで出て来た。現在は「查魚」Ⅱマンボウと書くのが標準らしい。マンボウは南方系の魚とばかり思っていたが、「查魚誌」著者原南陽は水戸藩の人、奥州、常陸のマンボウの事ばかり書いてあるある。

マンボウは最近では水族館で飼育は難しいが人気者として、よくマスコミの話題になっている。



『查魚誌』原南陽

平成二十一年（二〇〇九）年三月十二日（木）

清水 章博